



法務省“社会を明るくする運動”中央推進委員会主催
第64回“社会を明るくする運動”作文コンテスト

日本更生保護女性連盟会長賞



ちょっとだけおせっかい



神奈川県・伊勢原市立伊勢原中学校 3年

新井 美結
あらい みゆ

「この位置で大丈夫かな」と、ポスターが曲がっていないかを確認。「しっかり固定しなければ。」

これは法務省の職員の方々が自ら作成した再犯防止ポスターを屋外掲示板に貼る時の様子。動画サイトに投稿された音声も音楽もない三分の作品だけれどなんだかすごく温かさを感じた。「おかえり」とか「一人じゃないよ」とかそんな思いが伝わる。

再犯者による犯罪は全体の約六割だという。いかに再び犯罪をおかしてしまうかが窺えるが、仕事の無い人、居場所の無い人がその傾向にある。だからこそ更生には社会全体での取り組みが重要だ。

私は「社会を明るくする運動」の作文を書こうと思ったが夏休みに入っ
てすぐに未成年のおこした大きな事件があり、それ以外でも毎日の様に普通
に幸せに暮らしていた人が加害者のエゴで突然被害に遭ってしまうとい
う現実「社会を明るくする運動って何。どうしたら今の世の中は良くなるの。」と本当にわからなくなっていた。そんな時、ポスターの動画に
辿り着き以前母から聞いた、話を思い出した。

それは母の知り合いである現在六十代の女性が母に話した事。昔、自分の家の子供と同じくらいの子供を持つ家が近所であり自然と親しくなっ
ていった。お互いの子供を自分の子の様にかわいがり、時には叱り家族の
ように接していた。長い年月そうやって過ごしていたが、そのうちに近所
の家の男の子が非行に走り家庭でも暴力を振るうようになった。そして犯
罪もおかしてしまい少年院に入退院を繰り返した。

「私もね、何度も少年院に会いに行ったのよ。せつかく退院してもまた

家で暴れて悪いことをするからそのうちその子が入所中に内緒で家族が引っ越しちゃったの。退院して戻って来ても家が無かったから私の家にすまなそうに訪ねて来てね。何日かどっかで過ごしたんだろうね、だからお風呂に入れてやっでご飯も食べさせたの。」と言った。すると母が「怖くないんですか。」と尋ねたところ「そんなの怖くなんかないわよ。だって幼い頃から知ってるもの。あの子は根っこのところは腐っていないって信じていたから。」と返したそう。

居場所ってこうゆうことなのかなって思う。実際の親子ではなくても周りに支えてくれる人がいる、誰かが一人でも自分を認めてくれる人間がいるだけでやり直す一歩を踏み出せる。そんなことが何よりも大切なのではないか。

以前にも私はこのような話を、聞いた覚えがある。それは「夜回りおばさん」こう呼ばれている保護司の方であった。保護司とは法務大臣から委嘱を受けた非常勤の一般職公務員で犯罪や非行に陥った人の更生を任務とする。これは給与は支給されずボランティア活動と知った時、誰でも出来る仕事ではなく心から一人でも助けたいと思えるそんな人だけが出来る事だと感心した。

この保護司の女性は夜に町を見回り、たむろしている子供達に声をかけ日中は保護観察中の担当している子を自分の家に上げ面談したり、以前関わった子から食事を摂るお金がないと困っている電話が入れば「良く私を思い出したね。すぐおいで。」と手作りカレーでもてなす。彼らにとって心の「お母さん」だ。

自分の家に罪を犯した人を招き入れるという事はもちろん豊富な経験と信頼関係で結ばれているからではあるが、その人の将来を真剣に考え立ち直りを支援する、それはこれから歩む道の方角を照らしてくれる光のような存在だと私は感じた。

また犯罪をおこした本人だけでなく家族とも面談して再出発への環境を整える。その本人だけが問題ではなく周囲の関わり方も重要であるからだ。

現在まで受け持った子供の数はそうとうなものではあるが一人ひとりに対して誠実に向き合ってきた証しは子供達から寄せられた数多くの感謝の手紙だ。保護司の人の手から離れて仕事についての子の様子も気につ

てその働く姿をそっと見に行く。そして今日もまた悪い道にそれてしまっている子はいないか、困っている子はいないか、「夜回り」をするのである。

こんな「おせっかい」が現代には無くなってきた様に思う。考えてみれば今の私も余計な事に関わるのも関わられるのも嫌で、そんな事があればイライラしてしまう。しかし時には相手を真剣に思っているからこそのおせっかいは必要なのだろう。

この保護司の方の様な「おせっかい」は誰にもできる訳ではない。でも困った様子の人がいたら声をかけたり、その事を大人の人に相談することは私にもできる。社会全体が今の様な無関心な風潮ではなく「どうしたの。」そんな一言が自然と出る日本でありたい。